

家族でつかんだ代表

久保 冬晟

ぼくと剣道との出会いは三才のときだ。六年生になってはじめて、全日本都道府県少年剣道大会の宮城県代表を勝ちとった。ぼくのうちは、父、姉、兄、妹と剣道一家である。父は県で一位になった事もある。小さいころから姉、兄の試合や練習に連れられていかれ、体育館がぼくの遊び場だった。だから自然とぼくも三才から防具をつけさせられ、練習や試合に出されていたのだ。父は、小さいぼくをやさしく教えてくれた。三年生の県の大会で一位になるまでは、一位になってからは、父は厳しくなり、ぼくはいつも泣いていた。ぼくはその時、

「やめたい。もう剣道なんてやりたくない。」

と思っていた。父がこわくなってから、試合ではなかなか勝てなくなってしまう、負けるとさらにおこられる。ぼくは思った。

「どうしたら勝てるのかなあー。なぜ負けてしまうのかなあー。お父さんにほめてもらえるのはどうしたらよいのかなあー。」とそんな事ばかり考えていた。答えなんか見つからない。四年生から県外遠せいも増え、お父さん、お母さんが朝早く起きて一緒に応援に来てくれた。いつでも応援席からお父さんお母さんの

「頑張れ!!」

と言う声がした。ぼくは、

「勝ちたい。勝つとお父さん、お母さんが喜んでくれる。」
と思った。ぼくは、喜んでお父さんとお母さんの顔を見るとうれしくなる。常に剣道ばかりで、家族旅行なんてしばらく行っていない。ぼくのためにお父さんお母さんは、つかれていても、どんなに遠くても応援にきてくれる。今年七月、小学校最後の県代表の選こう会。お父さんが、

「行きたければ勝つしかない。頑張るしかない。自分しただよ。」

と言ってくれた。応援席にはお父さんの姿はなかった。ぼくは一試合一試合に集中していた。負けたらおわりだった。でもその結果一位抜けて代表にえらばれた。とてもうれしかった。お父さんの姿が見えた。お父さんのとても喜ぶ姿が目映った。あとからお母さんから聞いた話なのだが、お父さんはぼくのことを思って応援席にいなかったのだそうだ。家族で勝ちとった代表。ぼくは家族の優しさを知った。剣道を続けてこられたのも家族のおかげだ。厳しいお父さん。何度もやめたいと思った時もあったけど、

「お父さんありがとう。」

と今はすなおに言いたい。これからもぼくにたくさん剣道を教えしてほしい。今、ぼくの目標は、お父さんをたおすことだから。